特集２　学校図書館、司書教諭配置後の様子

IT化した学校図書館（雑感）

重　信　知雅子

「ピッ！ピッ！」

バーコードを認識する「聞き慣れた」音。

ここはスーパーのレジではなく、学校にある図書室の貸し出しカウンター。

現在では当たり前の光景だが、10年前は「貸出カード」に1冊ずつ書名と貸し出し期日、返却期日等を書いていた。その「貸出カード」も10年たった今、探すことも困難になってきた。

学校図書館の10年とはどのようなものだったのか？

○急速に進む学校図書館のIT化

平成（1989年）に入り急速に進むIT化。

時代はバブル絶頂期。

1990年代には学校に個人のワープロを持ち込んでワークシート等を作成する先生方の姿も見られるようになった。

また、学校にコンピュータが導入されたのもこの時期ではなかっただろうか。マウスもなく、キーボードのどの部分を押したらいいのか、間違うと壊れるのではないかと、入力は情報担当の先生方へまかせっきりだったように思う。

日本社会の動向はというと、

平成7年　（1995）インターネットブーム
平成12年（2000）ITブーム
平成13年（2001）IT不況（バブル崩壊）
平成14年（2002）情報家電景気

コンピュータが小型化し、家庭でもインターネットが使える時代となり、我が家でも平成9年に第1号のコンピュータを購入することとなったのである。

平成4年度（1992年）には、浦添市の中学校図書館へ沖縄県内初となるコンピュータが導入され、10年後の平成14年度には那覇市の全小中学校への導入が完了した。恐ろしいほどのスピードである。

○蔵書のデータベース化

私が勤めていた那覇市では、平成10年度（1998年度）から3期にわたり文部科学省の事業を活用し、蔵書のデータベース化を行ってきた。

平成14年度（2002年度）から実施されている学習指導要領に位置づけられた「総合的な学習の時間」へ対応できるように学校図書館の整備が始まったわけである。

学校図書館は本を借りたり、本を読んだりする場所。もちろん必要に応じて調べ学習も行っていたのだが。「読書センター」としての機能が中心だった「学校図書館」が「総合的な学習の時間」が開始されることによって、「学習・情報・資料センター」の役割も求められるようになった。

【データベース化のメリット】

①貸出・返却作業の簡素化。操作が簡単なので児童生徒が気軽に本を手にするようになる。特に字を書くのが遅い小学校低学年や

男子にとってはメリットが大きい。

②調べ学習をする際に、どんな本が自校にあるか検索が可能となる。

③児童生徒の読書状況を管理できるため、読書傾向を把握することができ、個に応じた読書指導が可能となる。

④貸出状況の把握が容易となるので、多読者や延滞利用者の一覧等をすぐ作成できる。

⑤一度データベース化すると新しい図書を購入しても管理が簡単に行える。蔵書点検の簡素化にもつながり、年間の貸出期間の延長が可能となる。

時代の流れも手伝い、勤務校の中学校でも蔵書のデータベース化が行われた。

3000 冊以上ある蔵書に 1 冊ずつバーコードを貼っていく。学校に配置された司書だけでは作業を進めることは難しく、保護者や地域へ声掛けをし、ボランティアを募った。

バーコードを貼った書籍を 1 冊ずつコンピュータへ取り込んでいく。気の長い作業であった。

現在のような貸出ができるようになるまでには、多くの方々の協力が欠かせなかった。

○データベース化による効果（那覇市）

コンピュータでの貸出が始まると、（予想はしていたが）生徒が図書館に殺到した。普段本を借りることのない生徒もコンピュータを操作したくて集まってきた。特に、読書をしない男子を図書館に向かわせるのにこのシステムは最大の効果を発揮した。資料は少し古いが、平成 13 年度のカード記入を行っていた時の読書量と、コンピュータでの貸出が定着しつつあった平成 17 年度の読書量の比較を下記に掲載する。

【年間読書冊数の比較】

平成 13 年度（カード記入）

平成 17 年度（コンピュータ）

小学校（那覇市）

	H13	H17	増加率
男　子	66.1 冊	129.7 冊	96%
女　子	96.4 冊	155.7 冊	61%
全　体	81.3 冊	142.7 冊	75%

中学校（那覇市）

	H13	H17	増加率
男　子	21.3 冊	37.8 冊	77%
女　子	34.7 冊	43.7 冊	25%
全　体	28.0 冊	40.7 冊	45%

表からもわかるように、男子への効果は顕著なものであった。

○「司書教諭」の配置と「学校図書館司書」

学校図書館の 10 年で大きく変化したのは貸出等のシステムだけでなく、人的なものも含まれるだろう。平成 9 年（1997 年）に学校図書館法の規定が改正され、12 学級以上の学校には「司書教諭」を配置することとなった。私たちの子どものころから、図書館には「学校図書館司書」が配置されていたため、「司書教諭」の配置には多くの誤解も招くこととなった。

昭和 28 年（1953 年）に制定された「学校図書館法」の第 5 条の第 1 項には

> 学校図書館には、学校図書館の専門的職務を掌らせるため、司書教諭を置かなければならない。

と定められている。

しかし、附則第 2 項で

当分の間、司書教諭を置かないことができる

と定められていたため、44年間も全国的に司書教諭の配置がなされていなかった。

その結果、全国の多くの学校では図書館を専門的に掌る職員を配置できず、開館することのない「書庫」となった学校図書館も多くあったと聞く。

財政的にゆとりのあった自治体は独自に学校図書館司書を配置していたが、多くの学校は図書館主任のみの配置であった。沖縄の場合、アメリカ政府統治時のシステムをそのまま引き継いだため、学校図書館に「司書」が配置されていたのである。

私たちが当たり前だと思っていたことが、全国的にみるととても恵まれたことだとわかったのもこの時期だったように思う。

規定の改正により、学校図書館には司書教諭が配置されることとなったが、多くが専任ではないため、全国的にみると学校図書館の改善は十分とはいえない現状だ。

【12学級以上の司書教諭発令率】（H22）

	小学校	中学校
全　国	99.7%	99.0%
沖縄県	98.0%	89.7%

【学校図書館担当職員（司書）配置率】（H22）

	小学校	中学校
全 国	44.8%	45.2%
沖縄県	97.8%	97.4%

図書館司書の配置となると現状はもっと厳しい。沖縄県は全国に比べてかなり優遇されていることが表から読み取れる。当たり前だと思っていた「学校図書館司書」の配置は、実はとても特別なものだったのかもしれない。

先に述べたが、この「司書教諭」配置の法改正は「図書館司書」の引き上げという誤解も招いてしまった。財政的に厳しい自治体は、図書館の専門職が配置されたのだから、司書は置かなくてよいのだと誤解してしまったのだ。確かに「学校図書館司書」の配置に関する法的な規定はないが、学校図書館を児童生徒がいつでも活用できる状態にするためには「司書」の配置は必須である。

この10年の間に研究団体の「学校図書館協議会」や「行政」側から学校図書館に関わることができ、全国の現状や沖縄の現状、「司書教諭」や「学校図書館司書」のことを理解できたことは、私にとって大きな財産になったように思う。

仕組みを理解し、司書教諭と学校司書がきちんと連携しなければ図書館機能を活かせないばかりか、学校司書の配置も危うくなってしまうことを痛切に感じた10年だったように思える。

○学力と学校図書館

全国学力調査が実施されて5年目。沖縄県の学力は、少しずつ改善の方向に進んでいるものの、全国との差は大きい。

文部科学省は「学力向上」と合わせて「読書活動」の必要性を示している。

以下は文部科学省「読書啓発パンフレット」から「読書の意義」の一部である。

子どもたちにとって読書は 言葉を学び 感性を磨き

表現力を高め
想像力を豊かにするなど
人生をより深く生きるための
力を身に付ける上で
不可欠です。

これからの時代に求められる国語力
（平成 16 年文化審議会答申）

読書は
人類が獲得した文化である。
読書により我々は
楽しく知識が付き
ものを考えることができる。
また、あらゆる分野が用意され
簡単に享受でき
しかもそれほど費用が掛からない
という特色を有する。
読書習慣を身に付けることは
国語力を向上させるばかりでなく
一生の財産として生きる力ともなり
楽しみの基ともなるものである。
国語力との関係でも
既に述べたように
読書は国語力を構成している
「考える力」「感じる力」
「創造する力」「表す力」
「国語の知識等」の
いずれにもかかわり
これらの力を育てる上で
中核となるものである。
特に、すべての活動の基盤ともなる
「教養・価値観・感性等」を
生涯を通じて身に付けていくために
極めて重要なものである。

「読書」は「学力向上」はもとより、人間形成の上でも重要な役割を果たすことが示されている。

今後は、「学校図書館」をどのように活用し、新学習指導要領に示された「言語活動」を実践していくかが課題となってくると思われる。

○終わりに

昨日、廃棄本の裏表紙に「貸出期間票」を見つけた。今は、コンピュータでの貸出・返却となっているため「貸出期間票」が貼られることはない。貼られていても何も書かれていないことが多いが、今回のは【1 の 5　○○○○　4,12　4,17　済】
と、何名もの生徒の名前が残っていた。

「あ！○○さんも読んだんだ」
「たくさんの人が借りているな」
「誰も借りてないんだ」
と学生の頃に戻ったような懐かしさがあった。今のシステムでは、誰が借りたのか、どれだけの人が借りたのか、本を開いても情報が入ってくることはない。便利になった反面、一つのコミュニケーションが失われたような気がするのは私だけだろうか？

「学校図書館」の蔵書がデータベース化され、コンピュータでの貸し借りが日常化して 10 年、その間にも社会は大きく変化し、本自体もデジタル化してきた。

携帯電話を使用して執筆し閲覧する「ケータイ小説」。インターネットでダウンロードして iPad やパソコンで読む「電子書籍」。

「ケータイ小説」や「電子書籍」は図書館

や本屋へ行く必要もなく、本棚もいらない。IT 化した現代を象徴する書籍だ。

入院患者のために電子書籍の導入を考えている病院もあると聞く。画面の中でページをめくることもできるので、今の書籍とあまり変わらないのかもしれない。が、アナログの書籍の紙の匂いや手触りは感じることはできない。

更に新しい電子書籍として、映像データや音声まで組み込まれたものも開発されているようだ。かゆい所に手が届く電子書籍、想像力はどうなるのだろうか。

学校図書館だけ見てもこの 10 年の変化はすさまじいものがある。社会がどんどん変化する中、学校図書館からアナログの書籍がなくなり、電子書籍が入った iPad やパソコンが並ぶ日もそう遠くないのかもしれない。

しげのぶ　ちがこ：南城市立佐敷中学校

株式会社 沖縄日立

本社：那覇市おもろまち 1 丁目 3 番 31 号
TEL：098-861-1045　FAX：098-863-2762
浦添支店：浦添市字城間 2905－3
TEL：098-878-1066　FAX：098-878-5276